

鹽樞：寒熱病第二十一

○皮寒熱は膚を閉く可い。毛髮焦り、鼻枯腦し。汗を得ざるは三陽の絡を取れ、以て午の太陰を補へ。

○^肌寒熱は肌痛み、毛髮焦りて鼻枯腦す。汗を得ざるは三陽と下に取れ、以て其の血を去れ。足の太陰を補ひ、以て其の汗を出せ。

○骨寒熱は病み、手足の所なく、汗注ぎて汗ま^いも。齒は未だ枯らぬ。其の少陰と陰股の絡を取れ。齒已に枯らば死しと治さざるなり。

○胃腹も亦然り。

鹽 二十一

○骨痺は節を擧ぐると用ふる山^りと痛み、汗注ぎて煩心す。

○三陰の經を取れ、之を補へ。身に傷る所取れ、血出づるは久く、及んば風寒に中る、若くは墮落する所取れ、四肢懈惰し、收まざるは名^(肉)を體惰と云ふ。其の小腹、臍下の三結交を取れ。三結交とは陽明太陰より、臍下三寸の關元なり。

○厥痺とは厥氣より、腹に及ぶ。陰陽の絡を取れ。主病を視るや、陽は裏し、陰は經は補ふ也。

○頸側部の脈は人迎、人迎は足の陽明なり。嬰女節の前には在り、嬰女節の後には午の陽明なり。右は扶突と云ふ。次の脈は

足の太陽脈なり。其名は天樞と曰ふ。次の脈は足の太陽なり
て、名は天柱と曰ふ。

□ 腋下の部脈は臂骨の太陽なり。名は天府と曰ふ。陽逆(逆)、
大輸部 頭痛、骨痛、と息をいふを得ざるは之を人迎に取れ。

鼻に痛し、鼻鞭りしは其突と方本より血を出るを取れ。
鼻の龍耳、鼻蒙(く)、耳目明らざるは天樞を取れ。

鼻の痛し、眩暈、身に任ぜざるは天柱を取れ。

鼻の痛し、内に逆し、肝脾痺り、血、鼻に溢るは天府と
取れ。此れ、大輸(天樞)の五部と爲す。

□ 臂骨の陽明は頰に入り、齒に編(編)る者有り。名は天樞と曰ふ。
不人迎(不人迎)

靈三十一一三

下の齒の齧なるは之を臂に取れ。要寒するは之を補ひ、要寒
せしむるは之を寫せ。

足の太陽頰に入り、齒に編(編)る者有り。名は天樞と曰ふ。上の
齒の齧なるは之を取らずは鼻と頰前とに在り。病に病まると

すは時、其の脈は盛なり。盛なるは則ち之を寫し、虚なるは
則ち之を補ひ。一に之を鼻外(鼻外)に出づる(鼻外)と云ふに取れ。

足の陽明は鼻と頰に入り、名は天樞と曰ふ。鼻の齧るは
鼻の脈に屬(鼻の脈)なり。日本に入り、數あり過有るは之を取らず

有餘と損ひ、不足は益せ。反するは益を甚し。

足の太陽は項を通じ、腦に入る者有り。正に日本に屬(属)す。

そがはと眼系といふ。題目苦み痢めは之を取ると通中の内筋
間に在り。膈にへりては乃ち陰陽と陽輸とに別れ。陰陽
相ひ交つては陽は陰にへり。陰は陽より出たふ目の銳眇に
交り。陽氣盛んれば則ち瞑目し。陰氣盛んれば則ち
瞑目す。熱厥するは足の太陰。少陽を取り。(皆之を留めり)
寒厥するは足の陽明。少陰を取り(此に)之を留めお舌縦かて涎
下り。煩ふするは足の少陰を取れ。振寒し。瀉瀉し。鼓頷し。
汗出つるを得ず。腹脹煩燥するは手の太陰を取れ。

口 虚言判すとは其の去るを判す也。實言判すとは其の来ると
判す也。春は絡脈と取り。夏は分脈と取り。秋は氣口と取り。

酉 二十一、五

口 久は經輸を取れ。凡そ此れ四時々の々々の時を以て判すを爲せ。
冬は脈は皮膚を記し。分脈は肌肉を記す。氣口は筋脈を記し。

經輸は骨髓を記す。

口 身に五部有り。心は二より。肺は二より。脾は二より。肝は二より。腎は三より。五藏の輸は四より。項は五より。此の五部に瘧
瘧有る者は死す。

口 病の平臂より始まる者は及が手の陽明。太陰と取り。

口 汗巨出する。病の頭首に始まる者は及が頭の太陽と取り。汗
巨出する。病の足脛に始まる者は及が足の陽明と取り。汗
巨出する。臂の太陰は汗出さず可なり。足の陽明も汗

出する可なり。既に陰を収りと汗出づる一甚きは、之を陽に
止む。陽を収りと汗出づる一甚きは陰に止む。

□ 凡そ利の害は、中より去らば則ち精泄の中より去らば
去らば則ち氣を致す^{あつまる}。精泄は則ち病甚しく^{かた}と極れ
氣を致せば則ち癰疽と爲る^{おこる}也。